

四川省における〈客家空間〉の生成

——成都市東山地区の都市景観開発を中心として——

河合 洋尚



はじめに

「四川省にも客家がいる」と言うと、四川研究者にすら驚かれることがある。一般的な見解に基づくくと、客家とは、中原（中国北部にある古代王朝の所在地）にルーツをもち、特に唐代末期より華南地方の山岳地帯に移住した、漢族のサブ集団である。客家は、漢族であるが、中原の古語を継承するといわれる客家語や、ユネスコの世界文化遺産にも登録された円形土楼をはじめとする、「独特」の言語・文化をもつ。今でも中国本土にいる客家の大半は華南地方に住んでおり、中国の北部や西部では相対的に少ない。それゆえ、四川省に客家の居住地が点在していること

は、日本では中国研究者の間ですら広く知られていない。このような状況を鑑み、筆者は、省都である成都市の東郊外にある東山地区を中心^①に、四川省で三度のフィールドワークを実施してきた。そして、四川省の客家（以下、四川客家と略称する）の概況を理解するだけでなく、東山地区にある洛帶鎮で客家文化を利用した都市景観開発が促進されていく歴史的経緯について調査をおこなった。興味深いのは、四川客家はもともと「広東人」と自称しており、客家としてのアイデンティティをもつてこなかったことである。「劉鎮発 2001: 92」ところが、学界、政府、帰国華僑による客家概念の規定と普及を受けて、特に改革開放政策以降に「広東人」は客家として自認するようになった。なかでも、東山地区は客家語の「方言島」であるという認

識が広まっていき、そこにある人・モノ・民俗を客家の特色であると強調することで、都市景観開発を進める動きが顕著になっている。

本稿は、客家という概念すら稀薄であった東山地区が改革开放政策後の社会経済的状况のもとで〈客家の空間〉として再編成されていったプロセスについて、洛帯鎮の事例から論じることを目的としている。議論の一部を先んじて述べると、洛帯鎮が〈客家空間〉へと変貌を遂げた経緯には、第一に、「広東人」が客家として再解釈されていく科学的な力学があり、第二に、客家文化という特色を利用して魅力的な〈空間〉をつくりだそうとする政策的な意図〔河合2014〕が関係している。このことを理解するため、本稿は、まず四川客家研究の変遷（第一節）および「広東人」が客家へと転換していく過程（第二節）について述べ、そのうえで洛帯鎮の都市開発が進められていった経緯（第三節・第四節）を明らかにしていくことにしたい。

一 華西漢族としての四川客家研究

四川省には、八千万人強の人口があり、そのうち約九四％が漢族である。そのうち四川漢族のマジョリテイともいえるのが、西南官話（四川語）を話す巴蜀系漢族である。ただし、四川省の漢族人口は巴蜀系ばかりで占められ

ているわけではない。言語学者・崔榮昌〔1985:6〕によると、四川省の漢族には西南官話の集団（巴蜀系）、客家語の集団（客家系）、永州語の集団（湖南系）の三大方言集団がある。さらに、四川省には別系統の言語を話す集団があり、多様な漢族集団が混在している状況にある。ところが、特に民族学・人類学の分野では長らく少数民族に焦点が当てられてきたため、四川省に内在する漢族の多様性について研究されることが少なかった。例えば、四川省の客家をめぐる研究が本格的に開始されるようになるのは、中国でも二一世紀に入ってからのことである。

ただし、二〇世紀の時点で四川客家の研究が全く存在しなかったわけではない。特に一九三〇年代から四〇年代という早い時期に、いくつかの先駆的な研究がみられることは注目に値する。その最も早い研究は、中国客家学の創始者として名高い羅香林である。羅氏は、清華大学でシロコゴロフらから民族学を学び、客家が中原から中国南部に移住した歴史について体系化したことで知られるが、その一環として四川客家の移住や人口分布についても初歩的なデータを提示した。他方で、一九三九年には四川大学西南社会科学研究所が客家調査団を組織し、成都で現地調査を実施した。なかでも、この調査団に学生として参加していた鐘禄元は、一九四一年に「蜀北客族風光」を、一九四三年に「東山客族風俗一瞥」を発表した〔嚴2009;謝2014〕。ま

た、一九四八年には華西協和大学に在籍していた徐宝田が、鐘氏の見解を踏襲して「四川省華陽縣客家族の研究」と題する卒業論文を提出した〔陳 2009: 5-6〕。

四川客家研究の二人の先駆者である羅香林と鐘祿元の研究は、広東省から四川省に移住した客家を主要な研究対象としていることに特徴がある。羅氏によると、四川客家はみな広東省か江西省をルーツとしており、特に広東省の東部・北部から四川省の一〇の県（成都、広漢、新都、資中、内江、瀘県、隆昌、榮昌、巴県、涪陵）に移住した〔羅 1992(1933): 123〕。また、鐘氏は、東山地区の「広東人」を客家として解釈したうえで、その「九五%は広東省東部から移住した人」〔鐘 1974(1943): 24〕と述べている。戦前の両者に共通しているのは、広東省にルーツをもつ客家を主要な研究対象としており、福建省をルーツとする客家に焦点を当てていないことである。

しかし、特に一九九〇年代に入ると、客家研究者は、広東省東部、江西省南部、福建省西部の境界地域（以下、「交界区」と呼ぶ）を「純粋な客家地域」とみなし（図1）、そこから四川省に移住した客家に着目するようになった。なかでも崔榮昌は、一九九六年の著作『四川方言與巴蜀文化』でその数を五二の県に拡大した〔崔 1996: 142-163〕。また、歴史学者である劉正剛〔1997〕も広東省東部と福建省西部にルーツをもつ族譜を検討し、四川省の

四〇以上の県に客家が分布すると主張した。

二一世紀に入ると、四川客家をめぐる著作や論文が大量に刊行されるようになるが、崔榮昌や劉正剛による論考は、現在の「通説」の基盤を形成したといってもよい。一九九〇年代末より四川客家研究をリードしてきた四川社会科学院の陳世松は、上記の先行研究を整理したうえで、四川客家の移住と人口について次のように記している〔陳 2009: 16-55, 2014: 31-32〕。

- (1) 四川客家の祖先は、交界区をルーツとする。
- (2) 四川客家の祖先は早くは明代末期より移住しているが、四川省への移住のクライマックスは、清朝の康熙年間から乾隆年間（一六六二—一七九五年）におこった「湖広填四川」運動を契機としている。
- (3) 現在、四川省には約三〇〇万人の客家がおり、四〇

以上の県にまたがって居住している。なかでも客家が集中して居住しているのは、成都東郊外の東山地区から資陽市、隆昌市、重慶市に至るまでの一帯、儀隴県や广安県などの東北部などである（図2を参照）。

しかしながら、四川客家研究をめぐるこうした「通説」は、客家を所与のカテゴリーとして固定的に捉える傾向が強い。つまり、「〇〇は客家である」とことを主張する反面、「どういう人を客家とみなしているのか」という説明に不足している。例えば、四川客家の偉人として朱徳（儀

隴県出身)や鄧小平(広安県出身)と並んでよく挙げられるのが、文豪・郭沫若である。郭沫若が客家とされる根拠は、第一に彼自身が「客籍」であると自称していること、第二に彼の祖先が福建省寧化県石壁郷(以下「寧化石壁」と略す)をルーツとしていることである[劉正剛 1997: 59]。しかし、これらは郭沫若が客家であるとする根拠としては磐石なものではない。まず、客籍とは、四川省の外



図1 中国南部および「交界区」の客家居住地

部から移住してきた移民全般を指しているため、客家は客籍の一部にすぎない[陳世松 2014: 33]。次に、郭沫若の祖先が寧化石壁をルーツとしていることは、彼が客家であることの何の論証にもならない。華南地方では非客家系の漢族も寧化石壁をルーツとしていることがあるし、もともと寧化石壁の人々は自身を客家とみなしてこなかったからである[河合 2013a: 212, 221-222]。



図2 四川省における客家の分布

「四川省において客家とは一体誰なのか」は、四川客家研究において今後検討していくべき根幹的な問題群である。ただし、この問題は四川省における〈客家空間〉の生産に関する本稿の趣旨から外れるため、別稿で議論することにした。ここで筆者が強調したいのは、四川省でいま客家とみなされている人々は、もともと「広東人」や「客籍」など異なる自称をもつ複数の集団が含まれていたということである。そして、本稿の対象である東山地区の客家の多くは、もともと「広東人」を名乗っており、彼らは、いくつかのルーツを通じて、自らが客家であることを自覚していった。

二 客家としての目覚め、客家団体の成立

次に、四川省の「広東人」がどのように客家としてのアイデンティティを獲得したかをみていくが、その前に東山地区で「広東人」と呼ばれている人々が誰なのかについて述べねばならない。というのも、筆者が東山地区で調査した限りにおいて、「広東人」とは必ずしも広東省から移民してきた客家の子孫を指すとは限らないからである。興味深いことに、四川省では、福建省や江西省から移住してきた人々の子孫も「広東人」を自称することがある。一例を挙げると、洛帯鎮保勝村の劉氏は、祖先が江西省贛州市寧

都県から移住してきたと認識しており、族譜にも江西省から移住した経緯が記載されている。しかし、彼らは「広東語」（客家語）を話すため、周囲から「土広東人」と呼ばれ、また「広東人」であると自認してきた。劉氏の高齢者A氏によると、彼ら江西省をルーツとする宗族の「広東語」は広東省をルーツとする宗族の「広東語」とほとんど違いがない。筆者のフィールドワークに基づくと、成都市の「広東人」は、言語の違いから、マジョリテイである「四川人」（西南官話話者）やマイノリテイである「保佬館」（湖南永州人）と自らを区別している。つまり、ルーツがどこであれ「広東語」を話す人々が、「広東人」として一つに括られているのである。

では、彼ら「広東人」はどのようにして自らが客家であることを知り、客家としてのアイデンティティを獲得していったのであろうか。目下、筆者が成都市でインタビューをして収集した一六のデータのうち、大多数の「広東人」が、一九七八年―二月に改革開放政策が始まるまで客家という言葉を聞いたことがなかったと答えている。ただし、例外が二件あり、そのうち最も早く客家を自認したB氏は、一九六〇年代に江西省で革命軍に参加した時に出会った豫州（今の宜春市）出身の客家から、彼もまた客家であることを教えられた。この人物もまた台湾の親戚から客家としての身分を教わっていたのだという。もう一例は先述

したA氏によるもので、彼の場合、一九七六年頃に息子から教えられた。A氏の息子は、政府機関で働いており、彼が先に「広東語」が実は本当の広東語ではなく客家語であるという知識を得、A氏にそれを伝えたのだという。

この二つの例は、いずれも軍隊や政府とのつながりを通して、比較的早く四川省の「広東人」が実は客家であるという知識を得ている。だが、軍隊や政府とのつながりが薄い民間人は、早くて一九八〇年代、多くは一九九〇年代後半に入ってから、自身が客家である事実を知ったようである。筆者が聞いた限りでは、一九八〇年代に客家という概念を知った人々は、いずれも四川省の外に出稼ぎ労働者として出かけた若者およびその親族・知人であった。C氏の例を挙げると、彼は、一九八〇年代後半に広州市へ出稼ぎに行き、そこで梅州市出身の友人と出会った。この友人はC氏と類似する言語を話していたが客家を自称していたため、C氏は、この時はじめて自身が客家であることを自認した。そして、C氏は四川省の実家に戻った後、自分たちが「広東人」ではなく客家であることを教えてもらったのだという。

他方で、一九九〇年代に入ってはじめて客家という概念を知った「広東人」も少なくなかったようである。筆者が知る範囲において、一九九〇年代後半に「広東人」が客家を自認するに至った経路は、出稼ぎ労働者によるフィード

バックを除くと三つある。(1)客家団体の成立、(2)学者による宣告、(3)世界客家大会の開催である。そのうち世界客家大会の開催については後述するが、この大会は客家団体と学術団体が主催していたことから、この二つの機構が四川省における客家意識高揚の契機をつくりだしていたことは疑いの余地がない。ここでいう客家団体とは一九九七年に成立した四川省海外客家聯宜会を指し、学術団体とは一九九九年に成立した四川客家研究センターを指している。では、両者はどのようにして成立したのだろうか。

まず、四川省海外客家聯宜会（以下「客聯会」と略す）は、四川省でおそらく初めて「客家」の文字を冠した団体である。この団体の創始者は、マレーシア帰国華僑である邱林である。邱氏はいわゆる四川省にルーツをもつ「広東人」ではない。彼は、一九二二年にマレーシアのスランゴールで生まれた三世の客家華僑で、広東省惠州市を祖籍地とし、一九三九年に抗日戦争の軍隊・東江華僑回郷服務団に参加するため広東省に移住した。そして、日中戦争や国共内戦が終わると重慶に行き、一九五三年の秋に成都へ移住した。成都では、省医院や市政府の計画出産部門で管理者として働き、一九九四年に退職した。一九九三年にマレーシアの惠州会館に訪れたのが契機となり、その後、四川省とマレーシアの客家の架け橋となるべく、一九九六年に在職時からつながりのあった洛帶鎮で客聯会を創設

した。客聯会は、インドネシア、マレーシア、タイなどから戻った帰国華僑を中心とし、三〇〇名余りの会員がいる。

次に、四川客家研究センターが創設されたのは、客聯会の設立より二年遅い一九九九年八月である。この学術団体の発起人となったのは、先述した四川客家研究の権威・陳世松である。陳教授は、四川省三台県出身の客家である。

ただし、陳教授へのインタビュールによると、彼の家系は福建省龍岩市をルーツとしており、客家としてのアイデンティティも有していなかった。だが、アメリカで族譜のデータ解析法を学び帰国して自身の家系の族譜をみたところ、祖先が福建省漳州市から四川省に移住していることが分かった。その後、陳教授は、邱林の影響を受けて客家としての自己に目覚め、一九九九年に台湾に行ったことが契機で本格的に四川客家研究を開始したのだという。陳教授によれば、彼は一九九二年から九八年まで洛帯鎮の観光センターで勤務していたことがあり、一九九八年に台湾の黄子堯が四川省に来て客家文化の高揚について語った時、当時の洛帯鎮・鎮長が客家文化を利用した都市開発を進めたと言いだした。そうした縁もあり、一九九九年に洛帯鎮で四川客家研究センターを創設したのだという。

この二つの機関の創設は、成都における客家概念の普及を促進することになった。二〇一四年六月に成都の県級市である簡陽の踏水鎮石炮村でワールドワークを実施した

時、ここには客家という言葉を知らない「広東人」がまだ存在していた。しかし、ここで話を聞いた数名の村民は、最近になって自身が客家であるという自覚をもち始めたのだと話す。そのうちD氏は一九九〇年代後半に客聯会のスタッフが村に訪問した時、彼らの話す言葉が広東語ではなく客家語であることを教えられたことが、客家を知るきっかけとなった。またE氏は、二〇〇七年に村に訪問した陳世松により、彼ら「広東人」が客家である事実を教えるもらったのだという。

注目に値するのは、客聯会と四川客家研究センターは連携して地元における客家文化の発見と資源化をおこなってきたことである。とりわけ両者は本拠地である洛帯鎮を中心として、客家文化を用いて都市景観開発を促進する重要性を政府に訴えてきた。そして、二一世紀に入ると、政府も客家文化に関心を抱くようになり、成都郊外の東山地区を都市化する資源として、客家文化の「特色」を利用するようになる。なかでも洛帯鎮は「中国西部客家第一鎮」の名称のもと、客家文化で彩られる街として大きく変貌することになった。

三 客家文化の政策的利用と洛帯鎮の都市化

ここで客家文化を資源とする都市景観開発がおこなわれ



図3 龍泉驛区及びその周辺

た舞台である、東山地区および洛帯鎮についてまず説明することしよう。

成都市は約一四〇〇万人の人口を抱える四川省最大の地区であり、二〇一八年現在、一一の区（錦江・青羊・金牛・武侯・成華・龍泉驛・青白江・新都・温江・双流・郫都）、四の県（金堂・大邑・蒲江・新津）、五の県級市（都江堰・邛崃・彭州・崇州・簡陽）を抱える。同地区のマジオリティは巴蜀系の漢族であるが、四川省の外から移住したさまざまなルートをもつ漢族が雑居している。そのうち、客家は成都市の管轄内に広く分布しており、例えば中心に近い錦江区紅砂村には福建省から移住した客家が多く居住している。ただし、全体的な傾向として客家が集中しているのは、成都市の東郊外にある龍泉驛区とその南部に位置する簡陽である（図3）。この一帯には宋代の詩人により「東山」と名づけられた龍泉山が横切っており、この山の麓一帯は俗に東山地区とも呼ばれる。公的な見解によると、東山地区の約五〇〇平方キロメートルは客家語の方言区となっており、五〇万人の客家が暮らしている。特に龍泉驛区には二五万人近くの客家が住み、一〇を超える郷鎮（洛帯、十陵、義和、西平、長安、万興、黄土、同安、文安、大面、洪河、西河など）で客家が高い比率を占めている。「中共成都市龍泉驛区委宣传部ほか 2003:59」。なかでも、西河鎮、義和鎮、文安鎮、長安郷、万興郷の客家が



写真1 都市開発後の洛帯鎮（2011年8月筆者撮影）

占める比率は約九五%、十陵鎮、西平鎮、黄土鎮は約九〇%を占める〔陳 2009: 47-48〕。龍泉驛区の客家は主に清の康熙三〇年〜乾隆年間に移住していて、多数は広東省東部をルーツとしており、なかでも五華県および興寧県の出身者が多い。一部は、江西省贛州市をルーツとする一族もいる〔中共成都市龍泉驛区委宣传部ほか 2003: 60〕。

本稿の主要な研究対象である洛帯鎮も東山地区に位置しており、総人口二万二二三九人のうち約八五%が客家である〔陳 2009: 47〕。洛

帯は三国時代の蜀の時代につくられた古鎮で、かつては「甄子場」と呼ばれていた。ただし、洛帯鎮は、成都郊外のごく普通の古鎮であったのが、一九九〇年末より大規模な開発プロジェクトが開始し、今では「中国西部客家第一鎮」と呼ばれる観光地

になった。そして、二〇一一年になるまでには、写真1のような景観として新たにづくりあげられることになったのである。それでは、洛帯鎮はどのように開発されていたのだろうか。

洛帯鎮における都市景観開発の契機となったのは、先述した客聯会と四川客家研究センターの設立である。東山地区において客家人口が突出して多いわけではない洛帯鎮が「中国西部客家第一鎮」と呼ばれるまでに開発された理由はない。客聯会の創始者である邱氏によると、氏が食べるものも十分に得られず苦しかった一九六〇年代初頭に卵を買うため訪れたのが洛帯鎮であり、この時ここにも彼と同じ客家がいることを知ったのだという。他方で、四川客家研究センターの創始者である陳世松は、先述の通り洛帯鎮で勤務した経験もあり、当時の鎮長も彼とつながりのある人物であった¹⁰⁾。こうした縁もあり、この二つの機構の長と洛帯鎮の長が手を取り合い、客家文化の「特色」を用いた都市化を発案し、それを実行に移していった。

洛帯鎮の都市開発は、一九九九年に正式に始動した〔梁 2008: 91〕。ただし、その先駆けとして、一九九七年より客聯会は、すでに古びていた洛帯鎮の広東會館、福建會館、江西會館の修築に着手するようはたらきかけ、それらを文物保護単位とすることに貢献した。さらに、客家文化を利

用して洛帶鎮を開発する案を移行するため、四川客家研究センターが「四川招商引資心重視打『客家牌』」（四川省で投資を招くために「客家ブランド」を打ち出すことを重視すべきである）という提案書を書き、一九九九年に省政府へ提出した。そして、当時の省委書記・謝世傑と副省長・李達昌はこれを重視し、二〇〇〇年二月に李達昌が関連部門の指導者を率いて洛帶鎮を視察した。そして、李達昌は、投資や観光を促進するために客家文化の「特色」を利用することに理解を示し、翌年（二〇〇一年）三月に龍泉驛区で開催される「中国成都国際桃花節」と結びつけ、客家をテーマとする国際シンポジウムを開催するという提案をなした。実際、この時に政府は桃花節の時期に客家と関連する一連のイベントを開催し、なかでも商談をおこなう「経貿洽談」で二三億元にのぼる投資を受けることに成功した〔中共成都市龍泉驛区委宣传部ほか2003: 60-61〕。他方で、後述するように二〇〇〇年の春節には政府の名義で「客家火龍節」を開催し、観光化への道を歩み始めた。

二〇〇二年以降、客家文化をテーマとしたイベントはさらに多彩な様相をみせるようになった。同年三月に龍泉驛区が「中国成都国際桃花節暨客家親情聯誼会」を継続して開催しただけでなく、西河鎮で「漁家樂、客家遊」、西平鎮で「桃花垂釣節」が催された。また、七月には政府、学界、メディアの提携のもと「客家水龍節」が洛帶鎮で新た

につくられた〔肖2009〕。そして、一月にはジャカルタで開催された第一七回世界客家大会に四川省の代表団が参加し、そこで第二〇回世界客家大会を成都で開催する権利を勝ち取ったのである。

世界客家大会は、正式名称を「世界客属懇親大会」と呼び、一九七一年に香港で崇正会ビルの再建を祝うイベントを契機に始められた。その後、台湾、アメリカ、日本、タイ、マレーシアなどで開催されてきたが、当初は世界の客家華僑が集まるイベントであり、中国本土の客家は参加してこなかった。ところが、一九九四年に広東省梅州市で第一二回大会が開かれると、中国本土の各地も主催するようになった。そして、中国本土としては、梅州市、龍岩市（第一六回）、鄭州市（第一八回）、贛州市（第一九回）に次ぐ第五番目の開催地として、成都市が選ばれるに至った。

第二〇回世界客家大会は、客聯会の主導で準備が進められた。その後、二〇〇五年一月二〜一四日に洛帶鎮で大会が開催された。この大会では、四川省だけでなく、世界各地から一〇〇名以上（推定）の客家が参加したのだという。また、客聯会の邱林が開幕のスピーチを客家語でおこなった。洛帶鎮における世界客家大会の開催は、新聞やテレビなど各種のマス・メディアで報道され、現地で客家という概念が浸透する重要な契機となった。また、世界客家大会の開催にあわせて、洛帶鎮では、インフラの整備

や住居の改造など、ハード面での開発が進められていった。洛帯鎮で生まれ育ったというある中年女性は、洛帯鎮の景観が今のように変化したのは、二〇〇五年にここで世界客家大会が開催された頃であると話す。また、洛帯鎮の政府機関に勤めるE氏は、洛帯鎮における景観の変化について、次のように説明する。

私は二〇〇三年に洛帯鎮に来ましたが、この道はまだでこぼこで、今のような景観ではありませんでした。世界客家大会が洛帯鎮で開かれる頃が変わっていったのです。特に政府は、二〇〇四年後半から二〇〇五年三月の桃花節〔三月頃＝筆者注〕にかけて鎮の外観を整えることにし、最初にサンプルとなる家を立て、住民に家屋の改造を呼びかけました。そのデザインがいいと思った経済力ある住民は自分で出資して改造しましたし、一般の住民に対しては金銭的な補助もしました。そうして、ここの景観は大きく変わっていったのです。(二〇一四年六月四日のインタビューに基づく)

四 洛帯鎮における文化的景観の形成

このように洛帯鎮は、客聯会、四川客家研究センター、各級地方政府の協力のもと、「客家文化の特色を備えた景

観」として生まれ変わっていった。ここで都市景観開発を推進する主要な役割を担ったのが、地方政府およびそれと提携した客家団体、学術団体であったことは、疑いの余地がない。ただし、洛帯鎮で景観がつくられていく過程において、地域住民、商売人、芸術家などが果たしてきた役割も無視することができない。彼らのなかには、客家ではない新移民も含まれている。そのうえで、彼らは、洛帯鎮が〈客家空間〉であるという前提のもとで領域内のモノや民俗を客家と結びつけ、文化産業を促進するようになったのである。ここでは、洛帯鎮において客家文化としての意味を付与されたモノおよびそれと関係する民俗を、文化的景観と総称する^①。そして、洛帯鎮において文化的景観は、政府、学者、客家団体、地域住民、商売人、芸術家など多様なアクターにより、三つの異なるパターンを通して創造されてきた。それは、第一に「表象」を通して創出であり、第二に「発明」を通して創出、第三に「模倣」を通して創出である。

まず、「表象」の代表的な事例は、前出の客家火龍節である。客家火龍節には、モデルとなる民間芸能が存在している。洛帯鎮保勝村の劉氏が長年継承してきたといわれる「劉家龍」である。すでに述べた通り、劉氏の祖先は江西省贛州市寧都県から移住したと考えられており、始祖の劉累は龍の使い手であったが、ある朝、龍を死なせてしまっ

たため、災いを避けるために四川省へ移住したと伝えられている。その後、この劉氏は龍文化の担い手として、「劉家龍」という龍舞を代々受け継いできた。そして、四川客家研究センターがその文化的意味を重視し、毎年春節時に政府主催のイベント・客家火龍節として洛帶鎮の中心で催すようになった〔梁音2008:91、譚・王2007:65〕。ここで確認しておくべきなのは、洛帶鎮には数多くの民間芸能があり、「劉家龍」はその一部分にすぎないということである。だが、学者が客家文化としての特徴を見出すことで、「劉家龍」が四川客家文化を代表するイベントとして拾い出されるにいたったのである。この時、「劉家龍」を代表的な四川客家文化として世間に広める貢献をなしたのが、マス・メディアである〔梁音2008:91〕。表象という概念は、その英語が *representation*（＝代表）であるように、一部のものが拾い出されて全体化される作用を指す。つまり、ここには選択と全体化の作用がはたらいている。

客家火龍節のように、もともと洛帶鎮にある一部のモノや民俗が選択され、四川客家文化として全体化されるようになった事例は、他にもある。桃の花もそうした事例の一つである。これまでたびたび言及してきた桃花節とはもと「広東人」が桃の花を觀賞するために集まった民間活動であった。郭一丹によると、それが龍泉驛区主催のイベントとなったのが一九八七年で、一九九四年には成都桃花

会と名づけられた。前述の通り、二〇〇〇年には省政府の支持で中国成都国際桃花節として開催されたが、まだ客家の二文字がついていないことに注目されたい。桃の花およびその景観が客家文化と結合して語られるようになったのは二〇〇一年であり、二〇〇二年の中国成都国際桃花節暨客家親情聯誼会でようやく客家の名が冠されるようになった〔郭2015:133-134〕。現在、東山地区では桃花米酒が四川客家の代表的な飲料となっている。この酒は、現地ではもともと「米酒」と客家語で呼ばれてきたが、桃の花との関係で四川客家文化の「特色」と結びつけられるようになった。桃の花もまた、現地で数ある花のなかから選択され、客家のシンボルとして全体化されてきたといえる。

「表象」の作用をもたらす媒体として、先ほど学術とマス・メディアを挙げたが、写真家や美術家の働きも無視することはできない。とりわけ二〇〇二年に四川省攝影協会が洛帶鎮に「客家文化創作基地」を組織したことは、重要な出来事である。それにより、多くのプロの写真家、アマチュアの写真愛好家、美術家が洛帶鎮を訪れるようになった〔肖2009:244〕。写真家や美術家は、同様に一部の景観を切り取って客家文化として展示するため、「表象」の作用をおこなう媒体の一つとなりうる。

次に、「発明」の代表的な事例は、客家水龍節である。火龍節と異なり、水龍節にはモデルとなる民間芸能が

地元が存在しておらず、タイ族の水かけ祭りにヒントを得て、学界、政府、メディアが新たに創りだしたイベントである〔梁 2008: 92〕。その意味で、水龍節は、もともと客家とは縁もゆかりもない。だが、火龍節が洛帶鎮における冬のイベントとして一定の成功を取めたことから、二〇〇二年七月より夏の観光イベントとして開催されるようになった。肖衛東〔2009: 245〕によると、火龍節と同様に水龍節も保勝村の劉氏によって担われており、イベント開催時には鎮政府が一日二〇元の給料を払って、出稼ぎに行っている青年男女を呼び戻している。そうすることで、水龍節の「客家性」を担保している。

この種の客家文化は、「表象」の作用によりつくられたそれとは異なり、もともと地元の特徴とはみなされてこなかったモノや民俗が客家の名のもとで売り出されることに特徴がある。その際、特定のモノや民俗を客家文化の言説と関連づけることもあれば、そうしないこともある。前者の例としては、「傷心涼粉」が挙げられる。涼粉という料理は四川省のいたるところで見られるが、傷心涼粉はより辛さを増した点で異なっており、東山地区では一般的に客家料理としてみられている。しかし、傷心涼粉は、昔から四川省にあったわけではなく、洛帶鎮における都市開発の過程で新たに発明された創作料理である。この料理を創作したのは楊明という商売人で、四川省内江市から一九九九

年に洛帶鎮にやってきて、まずは広東会館で店舗を営じたがうまくいかなかった。そこで涼粉に「麻辣」（花椒と唐辛子）を強めた傷心涼粉を売り出し、痺れで汗と涙を出させることで「傷心」（傷つく）することをアピールしようとした。それにより、客家が苦勞して生活し故郷を思い出すイメージと結びつけたのである〔趙 2007: 64〕。このイメージ戦略は、客家文化を利用した都市開発を進めていた洛帶鎮の実情と合致し、傷心涼粉はたちまち現地で人気を集める四川客家料理となっていく。洛帶鎮では、傷心涼粉を売り出す店舗が次々と出され、一種のフードスケープ（食の景観）を形成することとなった（写真2）。傷心涼粉の商売があまりに繁盛したため、後に客家が「開心」（喜ぶ）の状態になったことを意味する「開心涼粉」も創作された。

他方で、洛帶鎮では、洋服、ビデオ、ピアノ、パンダのぬいぐるみなど、どこにでもあるものまで「客家」と結びつけて売られるようになっていく。言うまでもなく、これらのモノは「客家文化の特徴」を表すものではないし、概して店主にすらそう思うられている。しかし、洛帶鎮が〈客家空間〉であるという前提から、ここにある何もかもが商売人により客家と結びつけられている。その結果、洛帶鎮の街なかに「客家」という文字の刻まれた看板がいたるところに建てられ（写真3）、こうした言語景観は、

洛帶鎮が〈客家空間〉であることを観光客に知らしめる効果をつくりあげている。

洛帶鎮が〈客家空間〉であるとする視覚的なイメージは、二〇一二年五月に「博客小鎮」が中心街の近くに建設されるとますます強まった。陳世松 [2015: 125] によると、このテーマパークは「博城」や「洛帶文化芸術村」とする案がでていたが、最終的には博識や博覧を意味する「博」と客家の「客」を組み合わせて博客小鎮と命名された。ここは客家の文化芸術や生活芸術を観光客にみせることをモットーとして建てられており、洛帶民間芸術發展保存センターもここに設立されている。二〇一四年六月の訪問時には、洛帶鎮の環境や客家関連のイベントを撮影した写真も鎮で展示されていた。なかでも注目に値するのは、博客小鎮の目玉ともいえる客家博物館の建設である。この博物館は円形土楼を模した建築構造になっており（写真4）、内部では中原にルーツをもつ客家の移住史や、四川客家文化にまつわる展示がなされている。円形土楼は客家のシンボルとして広く知られるようになっていくが、この建築形態は福建省西部を中心とする一部の地域にみられるにすぎず、世界中の大部分の客家地域には存在しない。もちろん四川省にも円形土楼は歴史的になかった。しかし、観光客や華僑華人らにとって円形土楼は容易に客家文化をイメージさせる物体であるため、福建省のそれを模倣して

洛帶鎮でも建設した。つまり、第三の作用である「模倣」を通して、客家の故郷である交界区の一部と洛帶鎮とがつながられるようになったのである。

おわりに——〈空間〉論からの考察

ここで本稿のキーワードにもなっている〈空間〉の概念についておさらいしておくことにしよう。日常生活において空間とは、一般的に何かしらの物理的拡がりを目指す。しかし、アンリ・ルフェーヴル [2000] は、空間を漠然とした物理的な広がりとし価値中立的に捉える我々の認識そのものが、近代のイデオロギーにより支配されると指摘する。ルフェーヴルによれば、〈空間〉とは権力の容器である。すなわち、権力者によつて境界づけられ、分割され、イデオロギーが投影される、価値付与的な領土概念として〈空間〉を捉えようとするのである。だから、〈空間〉を単なる物理的な環境と捉えるのではなく、その背後にあるイデオロギーを読み解くことこそ人文社会科学に求められる視点であると、ルフェーヴルは主張する [河合 2013b: 31-32]。

こうした〈空間〉の権力性は、洛帶鎮の都市開発においても顕著にみられることは、すでに上述の事例で示した通りである。四川省において、いま客家とみられている人々



写真2 傷心涼粉(左)と「客家傷心涼粉」という看板を掲げた店舗(右)
(2011年8月筆者撮影)



写真3 客家の看板を掲げて洋服を売る店舗
(2014年6月筆者撮影)



写真4 博客小鎮における円形土楼型の博物館。左が外観、右が内観
(2014年6月筆者撮影)

の大多数は、客家としての自己意識をもっていなかった。

しかし、客家の概念を知る学者や華僑たちは、四川省でも客家を「発見」するようになり、もともと「広東人」や「客籍」などと自称していた人々に客家としてのラベリングを付与するようになった。⁽¹⁵⁾ 現代的な意味の客家と「広東人」「客籍」とが果たして完全に一致する概念であるか否かは、第一節で論じたように検討の余地がある。だが、改革開放政策以降、彼らは客家として一様にカテゴリー化されるようになり、それに伴って客家としての自己に「気づく」ようにもなった。さらに行政的な権威により東山地区のような客家が集中して住む「方言島」が客家の居住区として境界づけられ、客家文化に溢れる〈空間〉とみなされるようになったのである。そして、この〈客家空間〉に存在するあらゆる事象は、たとえ歴史的に客家とは縁もゆかりもないどこにでもみられるものであっても、この〈空間〉に属するという理由だけで客家文化となる可能性を秘めている。

ここで〈客家空間〉内部のどの事象が客家文化として強調されるのかは、学界、マス・メディアだけでなく、地元住民、芸術家、観光客、とりわけ商売人の行為に委ねられることになる。例えば、商売人は洛帶鎮が〈客家空間〉であるという前提を共有しており、だから地元の特産品を客家文化の名のもとで売り出したり、新たに客家文化と関係

する商品を開発して売り出したりする。それだけでなく、西洋起源である洋服やピアノ、世界的に最も有名な四川省の生き物であるパンダまでもが、客家というブランドのもとで売り出されるようになっていく。他方で、観光客は「客家らしさ」を求めて洛帶鎮を訪れており、客家という記号が付与された何かを買ってかえる。こうして、この行政的・科学的に境界づけられた地理的範疇は、そのルーツが何であろうと、客家という記号を生成し、またそれを消費する、シミュラクルの〈空間〉となっていく[「ボードリヤール 2008」]。

ここで見落とすべきではないのは、洛帶鎮の人々の日常生活に埋め込まれている「本物の」習俗やモノは、必ずしも客家文化として強調されていないことである。例えば、水龍節のようにかつて現地に存在していなかった民俗が代表的な客家文化として宣伝される一方で、鎮内の燃灯寺で毎年農曆三月三日に催されていた「槍童子」のイベントは、かつて数万人の観客を集める盛大なものであったにもかかわらず今日ほとんど着目されていない。この年中行事は、「童子」の像を奪い取れば子を授かるというものであり[蘭 2005: 33-4]、こうした「迷信的」な要素が復興を妨げてきたのではないかと考えられる。また、洛帶鎮では傷心涼粉という新たな商品が代表的な四川客家料理として売り出されているが、実際に地元の人々は麻婆豆腐など他

の四川人とかわらない料理も食べている。もちろん、〈客家空間〉に存在する限りにおいて、これらも将来的に客家文化となるポテンシャルをもっている。だが、何が客家文化となり、何がそうならないのかは、その時々を経済的・政治的状况が関係している。したがって、洛帶鎮における〈客家空間〉の生成において、選択と排除のメカニズムをみてとることができる。

客家文化を資源とした〈空間〉の生成は、確かに飛躍的な経済効果をもたらした。政府筋の統計によると、一九九九年に洛帶鎮の工商税収が二五六万元、投資資金が一〇一〇万元であったのに対し、その二年後には各々が約三倍となった〔中共成都市龍泉驛区委宣传部ほか2003:61〕。また、二〇〇六年一月一五日の元宵節が明けた頃には、観光客が一〇〇万人を突破するなど〔陳世松2006:104〕、洛帶鎮は〈客家空間〉へと変貌してまもなく顕著な数字を残すこととなった。しかし、その一方で、〈客家空間〉となる過程で排除されたものが何なのかについて、ここで今一步考えてみる必要があるだろう。

一例を挙げると、保勝村の劉氏が代々継承してきた「劉火龍」は、この宗族の高齢者によると、今の客家火龍節の龍舞と多くの部分で異なっている。まず、「劉家龍」は、一八代にわたって続く伝統的な儀式であるが、特に固定した日を決めていたわけではなく、旧暦一〜三月の間に祠堂前

の広場で開催する行事であった。客家火龍節として鎮の中心街で催すようになったのは、二〇〇〇年の春節以降のことである。次に、もともと劉家龍には「情龍↓臥龍↓擺龍」のプロセスがあった。「情龍」ははじまりの舞であり、龍頭や龍体を翻しながら歩く。その後「臥龍」になると地上でも舞うようになり、「擺龍」は激しく揺らす高度な舞となる。しかし、客家火龍節では「情龍」だけしかおこなわず簡略化されている。皮肉にも学者が客家文化として資源化したことにより、「劉家龍」は中国のどこにでもある龍舞となり、本来のものは衰退の危機に陥っているのだという。

以上にみたように、〈客家空間〉の生成は、観光化とそれに伴う文化産業の促進に支えられるようになってきた。生活に根ざした「広東人」の慣習やそれに伴う物質文化がなおざりにされることがある。それにより、彼らが本来に残したいと考えているものが失われる結果を招いている。筆者は、こうした伝統民俗をそのまま保存すべきであると唱えたいわけでもないし、いま観察できる事象を客家文化として固定化することに賛同しているわけではない。しかし、〈客家空間〉の生成に伴い失われていく自文化に危機感を募らせている村民がいる限りにおいて、それを〈空間〉の生産体系にいかようにとりこんでいくか議論することは、無駄な作業ではあるまい。四川省において〈客

家空間」が生成されてきた過去を知る一方で、研究者がフィールドワークを通して〈客家空間〉の今後のあり方を考えることも、課題の一つであるように思えてならない。

注

- 〈1〉 筆者は、四川省の客家をめぐる文献研究をおこなったうえで、二〇一一年八月、二〇一四年六月、二〇一五年六月の三度、現地調査をおこなった。そのうち、一回目は嘉応大学客家研究院招標課題「当代『客家文化』観的形成及其在民間社会的影響」（河合洋尚代表）、二回目と三回目は文部科学省科学研究費「漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編——中・越隣接エリアの調査研究」（若手研究(B)・河合洋尚代表)の資金的援助を受け、嘉応大学客家研究院の夏遠鳴研究員と共同調査をおこなった。この二回にわたる調査では、四川社会科学院の李軍研究員にアテンドしていただいた。また、三回目は成都市区に限り星野麗子も調査助手として同行した。
- 〈2〉 二〇一五年の『四川統計年鑑』によると、二〇一四年の全省人口は約八一四〇万人である。筆者が四川省ではじめてフィールドワークをした二〇一一年は全省人口が約八〇五〇万人で、そのうち漢族が占める割合は九三・九%、残りの六・一%は少数民族であった(二〇一一年五月七日発布の「四川省第六次全国人口普查主要数抛公報」)に基づ

く。

〈3〉 この一〇県のなかには、今の重慶市も含まれている。羅氏は、隆昌と榮昌を「一級客住県」(ほとんどが客家で占められる県)としているが、他は「二級客住県」(客家の占める割合が約三〇%)と述べている[羅 1992 (1933): 129]。さらに、彼は、一九五〇年に著した『客家源流考』で三つの県(華陽・新繁・灌県)にも客家がいると補足し、西康を合わせると一四の県に客家の居住区があるともなして「松岡 1984 (1950): 491」。

〈4〉 「湖広填四川」とは、元末明初以降に生じた大規模な移民運動をいう。元末明初の張猷忠の乱、明末清初の呉三桂の乱によって四川省の人口が激減したため、清朝の中央政府は外の省から移民することで、これを補填しようとした[松岡 2017: 116]。実際には湖北、湖南、江西、福建、広東などの各省から大量の人口がこの時期に移住したが、なかでも湖広行省(今の湖北省と湖南省に相当する)からの移民が最も多かったので、「湖広填四川」(湖広でもって四川を補填する)と呼ばれた。この移住運動の一つの流れとして客家の移住があった。

〈5〉 もっとも江西省寧都県の客家語は、実際には広東省の客家語とは意思疎通が難しいほど異なっている。保勝村の劉氏が保存する『劉氏族譜』をみると、彼らの始祖は劉累であり、南京鎮江府沛県にいた。その後、二世・劉榮公が江西省贛州府寧都県に移住している。しかし、三世より南京鎮江府沛県に戻り、四世・劉邦は漢王朝の創始者となっ

た。その後、『三国志』で有名な一〇世・劉備が四川省で蜀の国を建設し、その子・劉禪も成都府にとどまったが、その子である一二世・劉禛が福建省の寧化石壁に移住し、二九世までそこで骨をうずめている。そして、三〇世・劉開七が贛州府瑞金県に移住し、四川省へ移住した直系の祖先である劉貴七郎は贛州府安遠県に居住した。四川省に移住したのは、劉貴七郎から一〇世代経った劉懷泰であり、族譜の記載によると、彼の遺体は宝勝寺の老屋近くの墓に埋葬されていた。族譜の記載と現在の客家観に基づくならば、この一族は劉邦や劉備の子孫ではあるが、寧化石壁を通過している点で客家であると「認定」できるかもしれない。ただし、A氏によれば、この一族は約三〇〇年前に江西省寧都県から四川省に移住していると宗族によりみなされている。寧都県はもともと客家としてのアイデンティティが希薄な地域で、羅香林ですらこの地で客家が占める割合は三〇%にすぎないと論じている[河合 2013a: 208]。寧都県から移住してきた人々が、周囲の「広東人」と混住するなかで、「広東語」を習得した可能性も考えられる。

〈6〉 中国において、客家と現在みなされている人々がもともと客家の概念を知らず別の自称をもっていった事例は、四川省だけにとどまることはない。本稿でも触れた寧化石壁をはじめ、華南地方や広西チワン族自治区の少なからずの客家がもともと客家としての自己意識をもっていなかったことは、別稿[河合 2012a, 2014]で述べた通りである。また、台湾の客家もかつては「広東人」または「客人」を

自称していた。台湾における客家アイデンティティの生成に関して、別稿で論じることにはしたい。

〈7〉 二〇一五年六月三日、邱林氏の自宅を訪れ、氏の生い立ちから客聯会の成立に至るまで三時間余りにわたるインタビューをおこなった。その録音データは、筆者と夏遠鳴が所有しているが、まだ公開していない。

〈8〉 筆者と夏遠鳴は、二〇一四年六月四日と二〇一五年六月三日に四川社会科学院へ赴き、陳世松教授から生い立ちや客家意識への目覚め、四川客家研究センターの創設および学術活動の詳細について、インタビューをおこなった。

〈9〉 邱林氏へのインタビューに基づく。マレーシア華僑であり幼少期から客家アイデンティティをもっていた邱氏は、似た言語を話す洛帶鎮の「広東人」を客家とみなしていた。氏によると、彼がマレーシアで住んでいた二〇世紀前半、現地では海陸豊の言語を「土話」、惠州人の言語を「客家語」と呼んでいたのだという。

〈10〉 二〇一四年六月四日、陳世松教授へのインタビューに基づく。

〈11〉 第二〇回世界客家大会を主導したのは客聯会であるが、正式には四川省人民政府が主催単位であり、成都市人民政府と客聯会が執行機関となっている。この大会の手引き書(大会手册)によると、一〇月一二日に代表者会議、華商サミット、晩餐会、開幕式が、一三〜一四日に西部客家文化節、世界客家歡聚洛帶、学術シンポジウム、四川成都投資洽談会、客家郷情報告会などが催されている。成都

新国際会展中心と洛帶鎮の双方が、会場として使われた。

なお、この手引き書および客聯会が発行する『四川客家通訊』には具体的な参加人数が記されていない。ここで一〇〇名以上と記したのは、当時、この大会の主催者であった邱林氏の記憶に基づくものである。

〈12〉景観とは、単に物理的環境だけを指すのではない。行為やイデオロギーを通して意味が埋め込まれた環境を指す〔河合 2013b〕。本稿では、文化的景観を、〈空間〉の物質的・視覚的あらわれとして捉える。

〈13〉E氏によると、客家火龍節や客家水龍節は基本的に劉氏が担っているが、劉氏の指導のもと、それ以外の者が参加することもあるという（二〇一四年六月四日、洛帶鎮におけるインタビューに基づく）。

〈14〉二〇〇一年八月に洛帶鎮を訪問した時、この博物館はオープンこそしていなかったが、円形土楼を模した建築は基本的に完成していた（詳しくは河合 [2012b] に掲載されている写真を参照のこと）。陳世松教授によると、この建築は基本的には福建省の円形土楼を模倣しているが、ペランダをつくっていること、中央に祠堂を設けず休憩場になっている点で、異なっているという（二〇一四年六月四日のインタビューに基づく）。なお、博客小鎮には観光センターもあり、その前の広場では客家と関連する年中行事など文化イベントを定期的に催している。

〈15〉飯島典子 [2007] は、客家の概念がまず東南アジアに出現し、そこから香港、広東省中部、東部を通して中国に

フィードバックされていくモデルを提示している。このモデルは、四川省の事例においても有効であると筆者は考える。というのも、四川省における客家概念は、第一に華南地方で育まれた客家概念を四川省に学術的に適応すること、第二に邱林氏のような東南アジアからの帰国華僑によってフィードバックされることで、普及されていったからである。

参考文献

- 陳世松 2006 「論客家文化資源の開発與利用」『成都大学学报（社科版）』第五期、一〇四—一〇七頁
- 陳世松 2009 『四川客家』広西師範大学出版社
- 陳世松 2014 『四川客家建構論』成都大学学报（社科版）第二期、三一—三三頁
- 陳世松 2015 「從洛帶博客小鎮看客家文化產業的新走向」夏遠鳴・河合洋尚編『全球化背景下客家文化景觀的創造』暨南大学出版社、一二—一三二頁
- 崔榮昌 1985 「四川方言的形成」『方言』第一期、六一—四頁
- 崔榮昌 1996 『四川方言與巴蜀文化』四川大学出版社
- 飯島典子 2007 「近代客家社会の形成——「他称」と「自称」のはなまじ」風響社
- 郭一丹 2015 「東山客家的「花」様景觀」夏遠鳴・河合洋尚編『全球化背景下客家文化景觀的創造』暨南大学出版社

社、一三二—一三八頁

H・ルフエーヴル 2000 『空間の生産』齊藤日出治訳、青木書店 (Lefebvre, H. 1974 *La production de l'espace*. Basil Bachelon.)

河合洋尚 2012a 「広西省玉林市における客家意識と客家文化——土着住民と帰国華僑を対象とする予備的考察」『客家與多元文化』第八期、二八一—四七頁

河合洋尚 2012b 「覚醒する自己——四川省郊外の客家意識」『月刊みんぱく』九月号、二二—二三頁

河合洋尚 2013a 「空間概念としての客家——『客家の故郷』建設活動をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』三七号、一九九—二四四頁

河合洋尚 2013b 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』風響社

河合洋尚 2014 「族群話語與社会空間——四川成都、広西玉林客家空間の建構」韓敏・末成道男編『中国社会の家族・民族・国家的話語及其動態——東亜人類学者的理論探索』(Seni Ethnological Studies 90) 国立民族学博物館、一五—一三二頁

黄雪貞 1986 『成都市龍潭寺の客家語』『方言』第二期、一六—二二頁

J・ボードリヤール 2008 『シミュラクルとシミュレーション』竹原あき子訳、法政大学出版社 (Baudillard, J. 1981 *Simulacres et Simulation*. Paris: Editions Galilée.)

瀬川昌久 1993 『客家——華南漢族のエスニシティとその

境界』風響社

蘭玉英 2005 「成都東山客家方言中生命的民俗語言現象詮訳」『西華大学学报』第三期

梁音 2008 「社会記憶的文化資本化——以洛帶客家社会記憶資源の旅遊開發為例」『成都大学学报』第四期、九一—九四頁

劉鎮発 2001 『客家』——誤解の歴史、歴史的誤解』学術研究叢書

劉正剛 1997 『閩粵客家人在四川』広西教育出版社

羅香林 1984 (1950) 「客家源流考」羅翹雲・羅香林『客家語(付録客家源流考)』聯合文物供应社有限公司、一一—四頁

羅香林 1992 (1933) 『客家研究導論』上海文芸出版社

宋妙 2005 「四川客家人的来源」『天府新論』第一一号、二五八—二五九頁

松岡正子 2017 「青蔵高原東部のチャン族とチベット族——2008 汶川地震後の再建と開發(論文篇)」あるむ

譚志蓉・王麗 2007 「立足客家文化、發展休閒旅遊——洛帶古鎮旅遊調查報告」『成都大学学报(社科版)』第二期、六五—六七頁

肖衛東 2009 「喧騒後的静寂——洛帶客家文化產業群体现狀研究」『商場現代化』第一期、二四四—二四五頁

謝惠祥 2014 「四川客家文化研究的先行者——記四川省人民政府文史研究館已故館員鐘祿元先生」『文史雜誌』第四期、九—一〇頁

- 嚴奇岩 2009 「鐘祿元和『蜀北客族風光』——兼談四川客家研究的開山之作」『巴蜀史志』第三期、四九—五一頁
- 趙一 2007 「傷心涼粉、開心賺錢」『新西部』六
- 鐘祿元 1974 (1943) 「東山客族風俗一瞥」『風土什誌(復刻版)』台北：東方文化書局
- 中共成都市龍泉驛区委宣傳部·四川客家研究中心·中共成都市龍泉驛区委黨校 2003 「挖掘客家文化豐富資源、促進社會經濟全面發展——龍泉驛區開發利用客家文化資源的實踐和思考」『中共成都市委黨校學報』第二期、五九—六二頁